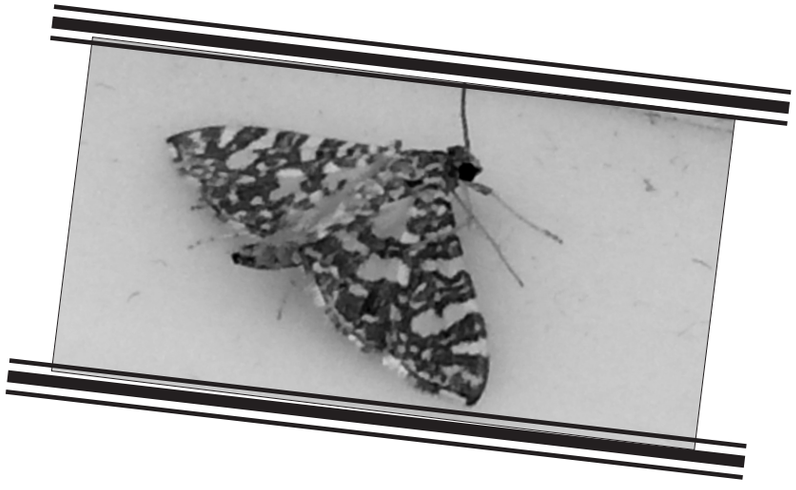
月　刊

Mélange

Vol.107



2015.11.01

詩と評論

月刊「Mélange」 Vol.107 2015.11.01 「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」107 号　目次

詩 & 俳句

すきすき事事無礙 ……安西佐有理　03

波……岩脇リーベル豊美　04

戯言……野口 裕　05

冥王星の青い空 ……中嶋康雄　06

幼子とことば……にしもとめぐみ　07

芳香 ……月村 香　08

つんのめってあるく ……大橋愛由等　09

メロディ…… 富 哲世　12

〈花野伝説〉秋桜二十句・白萩十句　(俳句)……高橋雅城　13

マルグリットの記憶喪失学（雲を集めた窓） ……髙谷和幸　14

「なごみ」はゆがんでいたが…ver.2 ……有時秀記　16

影武者の生殖に関する金融商品の地層処分について ……千田草介　17

New Seasons　四つの季節 ……中堂けいこ　18

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈10〉……冨 哲世　10

HANA だより〈11〉……中堂けいこ　15

神戸詞あしび 96「独立をのぞむ人たち　カタランの行く末は」……大橋愛由等　20

編集部だより★28／「Melange」月例会は、10 月はどうしても日曜日が詰まってしまい、11 月に二回することになりました。第一部の読書会では、富哲世氏が「他者入門〜他者論その①」として、福間健二詩集『あと少しだけ』(2015 年 6 月 思潮社刊)を参考文献に語ります。富氏いわく「〈きみ〉、〈あなた〉という二人称は特殊な他者、他者の否定としての他者である。他者としての他者は外部性として訪れる何かであるが、きみ、あなた、お前…と呼び掛けられる他者、〈わたし〉によって対幻想的、共犯性のうちへと囲い込まれてしまう他者は、間主観性の閾の上にいる他者であり、〈わたし〉はその〈きみ、あなた、〉の扉を開け閉めして外へ内へと出這いりする。その有り様の複合性を福間健二の詩集にさぐってみたい。」とのことです。〈大橋記〉

◆すきすき事事無礙

安西佐有理

コンロの熱で白っぽくなってきた中華鍋のふちに
卵の殻が、30度ほどの角度でぶつけられ
こつんと、とろんと
鍋肌から鍋底へ
すべりおちる
0.2秒ほどの
時空の
すきま
で
もう
君と私
わけられない
ジジジジジジムゲ
中華鍋が鳴っている
殻の中から台所宇宙に飛び出た
君と私、どちらともなく鳴っている
ああもうおなかがすいたはやくはやく
おなかも鳴っている―君の？　私の？？

◆波

岩脇リーベル豊美

千の難民が溺れ死んだ内海の水深はその憧憬との等価を示している
長い岸を延長するとG線上ではいまもむかしも砲声が響いていた

踵のしたはただ海水
わたしは一枚の紙切れを隔て海水のうえに立ちすくんでいる
船が母港を忘れて沈められるとわたしの財布は鍵穴に合わないまま
閉じ籠められ溺れる人を救えない　わたしの鈴は俯いたきり歌わない
聖められているのに穢土のひとに盗まれて
貧しい国をより貧しくしている

われわれヨーロッパ人は誰もがいち度は難民だったと
ユグノーを先祖にもつ配偶者との婚姻によって生じた親族関係の女性が言った
わたしはヨーロッパ人ではないという事実を前提に

漕ぎ出す岬　舞いもどる手続きをする島々流する
色彩世界の痛みを湛えて運河は河口から逆
地中海には魚がいない　太平洋とはまったく比較できない

◆戯言

野口　裕

いきったらあかんで
言葉なんかとろとろ出すもんや
なんせほとんど他人さまの持ちもんやさかいに
とろとろ出すうちに
ことんと小っちゃな玉も出る
まあみんなは外れと言うけどな

見てみいやナスの皮には
どっかきらきら星が映っとる

◆冥王星の青い空

中嶋康雄

墓参りをする
百円ライターで線香に火を点ける
ライターは金属部分が錆びている
土に穴が空いており
下から声が聞こえる
供える饅頭の皮に少し黴が生えている

今年も廃車を引き延ばす
家の部分に不都合が生じる
部分は部分で
全体ではないから
そっとしておく

砂糖は入れない
冷めた乳製品の薄い膜がかかる夜
少し寒いが毛布はしまったままだから
丸くなって眠る
いつまで経っても
なにもかもがもやもやで
むしかえす願いは空しい

黄色い蝶が舞うバス停で
雑草が枯れ始めている
下からの声は
なにを言っているのか
わからないまま
影だけがのびる

◆幼子とことば

にしもとめぐみ

三歳になったおまえはもういろんなことはなせるね
一歳の頃は
みぶりやまなざしだけで話せたね
わらってわらってわらった
　神さまの庭で遊んだ時間だった
もうすぐおまえはパンドラのことばも使わなきゃいけなくなるね
大人になること
戦うこと
ことばを使って生き抜くこと
ことばを必要としなかった美しい時間よさようなら

◆芳香

月村香

午睡のあとの芳香よ四時間の空気の停止よわ
たしは嗅ぐすべてのほこりが床にたまりわた
しが起きてベットに腰をかけるとおもむろに
漂いくるあなたたちよあなたたちちはどこと
かの香水あるいは溶けた髪の誘惑ちょっと部
屋から出てもどってくると迎えてくれるだか
ら午睡をするだから午睡をするそれはひとつ
の詩が熟成していく過程に似ている詩も一緒
に書いてねかせるそして香を嗅ぐそれが完成
されたものでないとしてもわたしになる必要
ならば扉を開くが最初の印象は強烈でなけれ
ばならないそれがわたしの芳香の定義

◆つんのめってあるく

大橋愛由等

行き過ぎて川端についた
きのうも今日も誰からも
誘われないわたしがいて
意味なく右ポケットに手
を入れたのは昼から三度
もうすぐやってくる冬に
差し出すつもりの長文の
手紙に貼る切手を買いに
外出したのだと思い出し
ポストオフィスへ引返す
廃嫡された王が刻された
き、切手はありますかと
たずねた吏員がわたしを
見つめるまなざしは例え
ようもない悲しさに満ち
きっとその吏員は廃王の
末裔に違いないと直感し
浮世絵の切手シート二組
持ち小風に吹かれあるく
私小説のさなかに生きる
そう願ったわたしはまず
乾物屋に向かってあるき
地域特産ウスターソース
を買いこんで溜息をつく
つんのめってあるく姿が
私小説的になっているか
非我を今日も認めないか
きらいな食べ物は他者か
などらしさを極めようと
ハンチング帽を被り直し
シベーリさんのパン屋の
バケットを買いたくなり
財布をまさぐっていたら
〈魂の扉〉と書いてある
紙片を見つけこすったら
〈ホロホロ鳥を食べよ〉
の字がうかんできたので
花を一輪折ろうときめる

富哲世

ひと言詩評 10

貞久秀紀〜詩集『明示と暗示』

それらの詩はある種の謎解きであると同時に、その奥に控えてある、なぞなぞである。

ある文によって暗示されることがらがすでにその文に明示されている――そのような文があるだろうか。ゆれている枝によってよびおこされるものが、ほかでもないそのゆれている枝であるように。

（詩集「明示と暗示」前文）

このウロボロス的論理構造で迷宮化されている序文は、わたしたち、という言語化された作品が生まれる以前に世界やことばか先行しているように、あるいは対象を語るとはそれを語る以前にすでにそれが名指されてしまっていることばで語るほかないという風に、その先詩作品に当たろうとする者にあらかじめの引導 を渡している。

ここでは〈暗示〉は世界の在り方を〈明示〉するための自明の前提とされているかのようだ。ここではカントの言うように「物自体」は、反省によってとらえられないという〈真理〉のうちに安らっているかのように見えるからである。

この前書きだけを取り出せば、その〈明示〉と〈暗示〉の風景の演繹的帰結の実例として、

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪降り積む
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪降り積む

という三好達治の「雪」の二行詩をそこに持ち出しても、一向差し支えないとも見える。暗示が自明の前提ならば、暗示や余白のない世界を考えることは難しいからだ。ところが実際は、それとは全くちがった風貌を持つものである。

貞久秀紀（さだひさひでみち）のことを戯れにアリストテレス的詩人と言ってみようか。ギリシャ時代は思考の名において、哲学と科学、哲学と詩の、蜜月時代だった。その代表格のひとりが例えばアリストテレスだというわけだ。卑近な現象を取り上げて、普段当たり前のこととして受け入れられていることがらに反省を加えて、敢えて疑問を投げかけ、留まることなき摂理の動勢を原理化して見せる。なぜ？という疑問符の下に世界を一端要素として解体したうえで連合として明るみに出す。貞久が〈明示〉にこだわったことには世界のとらえ難さをとらえ難さのままにとらえ、時間も空間も部品化して場面として現象を問い直す、「今」の解明の欲動が顕在していると思われる。

石のこの世

この石はひとよりもまえからこの世にあり、ながめていてあきることがない。思いがわいてくるでもなく、みていてこの石でなしにみえることもない。
ここに石としてひろがり、
みえるもの、ふれうるものとしておおい隠されずにありながら、この石でないところではひろがらない。
にもかかわらずあきない。そして、思いがわいてこない。

（全行引用）

超越論的自我に生じる現前と意識の有り様。それ〈自体〉としては捕捉できないことを明示しようとすれば、この石の孤立はひとつの仮象の存在論である。それは決して石自体には到達できないが、〈石でないところではひろがらない〉という差異性を存在として纏い着けながら自足している、ように見えている仮象ゆえのひろがりを持つ。

明示と暗示

窓のそとにほそながく、しずかにゆれている枝は、ながめていてあきることがなく、何かそこにゆれうごくものが枝であることが、枝ということばとともに思いおこされる。

この何かはなにものにもさえぎられず、目にみえているかぎりのことがただ目の前に示しだされており、示しだされたものによってそれが枝とよばれたものであると思いおこされる。

思いおこされよみがえることばである枝は、目のまえにゆれうごく当の何かとともにあり、それを暗にさし示し、明らかにさし示しているのではないだろうか。

（全行引用）

貞久流の「言葉と物」である。それは〈思いおこされる〉という反復によって遠回りにそれ自身となる、仮象の、物のすがたである。

これらの詩は、現前する差異の総体としての出来事の世界の、そのときどきの布置の意識化であると言える。

空気のようにさわれないものがそれらを結びつけている、常に全体と部分との緊張と連合的位置づけの記述に拘泥しまた、そこに出来事としてそのように在ることはそのように在ることであるというトートロジーを差異性として反復し直しながら、〈明示〉を語ろうとする。それは記憶を耕す回想の回路や、現前する風景の網膜上に写し出された出来事の像を、意識の脈絡として追うように解読する所作であるかのように思われる。それは写生というものが網膜像に対しての不履行を前提としているとしても、そうではなくはじめからのリアリズムの断念あるいは拒否、敢えて言えば帰趨として自らの山場を知るように焦点化された、詩のキャンバス上の再構成とも言うべきものなのだ。その焦点化の半意図的半恣意的な目の粗さが、写像の全体性を世界として意識より追放するはたらきをしているのではないだろうか。そしてそれが世界自体の到達不可能性となって、わたしたちの卑近さと世界を結ぶ存在の実例として置かれているように思える。この詩集が同一律の不快に起因するような、生真面目さと復讐的なユーモアの奇妙な同居として、わたしたちの夢を破る目覚めの面白さといぶかしさの湧き起こるのを待つようでもあり、トートロジーを食い破って、いまとは先の続きにほかならず、ここではすべての〈それ以外〉を孕んでここと呼ばれるところであると再認されるとき、風もないのに手を振る枝葉や草木の揺れや小さな破れの感覚を暗示として引き受け、内包して、世界が白紙化されているように見える。

（思潮社　２０１０年７月）

◆メロディ

富　哲世

好きのあり方が違う
と
電気を灯けた
〈ほろびてゆく雲の朝〉のようにほろびてゆく朝の
垂れた紐の先で
まだ浅い　まばゆかった近い場所で溺れている
水栽培のガラスポットに
丈の長い葉っぱが三本
道と慕われつづけている

湧き出る時間を懲らしめて
しわだむ
暮らしと名付けられている
そこで
差し渡る影の尺度も
ゆかの上の傾ぐからだも
明るく　可笑しい

窓の外には土
柱の罅の小バエも
きっと悲しんでいる
傷を歩いて　たどりつく
絶え間なく濡れてゆく音階を見上げ
重い国のドアが少しだけ
開いている。

◆花野伝説

高橋雅城

秋桜　三十句

余命知る白いばかりの秋桜
いい加減コスモスやめて天にゆけ
秋にして転校生のいるらしく
宛名なき手紙受けとる秋初め
稲妻の走る現世に人疎く
今日の日は終わり稲妻はしるころ
幸せの青い鳥なら八月に
霊柩車ゆく八月が澄ましてる
ボサノバは控えよ新盆過ぎるまで
この記憶このひぐらしとともに消え
妖怪やここにひぐらし鳴くころと
新涼に歯が痛みます昨日から
新涼の歯科衛生士せきばらい
麻酔薬一つ転んで涼新た
妖怪は一眠りして秋涼し
秋めくやおはじき三つくださいな
秋思うここに秋あり竜田揚げ
恋人は秋の彼方に逝きました
突然に歩き始める秋のよう
忘却のかなた机を洗う人
いくさ経て洗われがたき硯かな
洗いても常世に残る机かな
慟哭の記憶硯を洗いつつ
半生を病いでまたぎ星祭
ひぐらしの鳴くころ死者の幾人か
都には病む人多しちちろ虫
都へと運ぶ病いや曼珠沙華
納屋を焼く秋の螢や人さらい
ここからは花野そこまた花野かな
牛流る秋の出水の伝説に

白萩　十句

鬼むしりとばしる白き萩の花
鬼の手にこぼるるばかり白き萩
鬼の腕鬼の手ありて萩さかる
白萩や鬼消え去りし洞一つ
萩むしりむしり難きや鬼逃ぐる
赤鬼はうそぶく萩の花言葉
青鬼の人相に勝ち萩さかる
萩群れて鬼のゆくさき知られざり
鬼面の壊えては萩の花無言
人知れず咲く萩鬼の知らぬ由

◆マルグリットの記憶
喪失学（雲を集めた窓）

高谷和幸

※

マルグリットの身体「雲を集めた窓」は遠さの喪失だと言われる。それは彼の「ブレス」の、「窓を集めた窓」が口から息を吐くイメージの、その空間のひしめくさまであり、「妻殺しのピエロ」のパントマイムの序文を引用する三番めの著述家によれば窓（表面化）とは「蝟集している」無音の声であるが言葉ではない「むらさき色の穴の収縮」であって、いつもあるとは考えにくい、「もりあがる土なの」だそうだ。しかしながら意識に上らないとはいえ、「いつも持ち歩く直示」と言われる息継ぎのための「停止状態」が身体（表面）の死の潜勢力としてはたらいていることは彼にとっても異議を唱えようもないことだろう。その危機感は身体（もうそれを表面といってよいだろう）の目である、「むらさき色をした穴の収縮」の物体性そのものにまぎれて身体の他の一部になってつぎつぎと「生と死」の再生を果たしていく。さながら椅子に腰かけたマルグリッドは「直示によるものの召喚」を待ち続けて、待ち続ける身体性を獲得していくように。原文には、「素朴な、あるいは数奇な数々な理の渦が巻きあがる（表面）」＝（「身体」）「は『白い幽霊』なの」だと、書かれている。さて、それはかくのごとくマルグリットが椅子から立ち上がる時、それぞれの指先は彼の眼球に変わり、重力に対して抗う膝に引き継ぎつつ、布で覆われた腰部に眼球が移っていく（後になって、この時のマルグリッドの身体はスリンというバンブーで出来た楽器に似ていたと言われる）のトッカップの穴を塞ぐ指の手触り「白い幽霊」のように「自己の死」を「手触り」で確認しようとする、「走行する存在」である。運動体の「ひとは肋骨」にあるとき、呼気と吸気の擦過する思いがけない一瞬は、いいかえれば、感情や観念などの実在まで送り届ける静かな「穴面」だが、あらかじめ、それは表面的には等間隔でむらさき色の穴が繰り返されてきたわけではない。それは穴に、眼球の穴は、たましいと言ってもよい穴に、それはそこに呼吸し、「穴を塞ぐ」ことで「どこにでもある」マルグリッドによつてスリンの振動に置き換えられる音叉「共振の距離」として音をだすのだ。「雲を集める…」とはそういうことなのだろうと思う。「雲を集めた窓」はスカイツリーの絵葉書のように遠さも近さも感じさせない、それはどこにもない、誰のものでもない「窓を集めた窓」ということだろう。あの時、パリの16区の隘路にあったアトリエの、漆黒の「窓」を、夕方から激しく降りだした雨が濡らし続けていた。裏の面から表面へ、窓の外側を雨粒が叩いていた。窓の、無音のことばのエクリチュールであったマルグリットの枠組みは、彼の記憶喪失学の扉なのだ。それを開けると、そこにあるのはいつも視界から逃げていく表面。著述家の思惑は「表面化とは、根源的に――あらゆる抑圧の試みにもかかわらず――表面そのものがあらわれることではないだろうか」というものだった。

※

レポート「ものと身体の隙間にある表面」。

調査する者と男子学生が三人、丸い座卓のまわりに「すわって」いる。

記録。

くちをあけて　てのひらを　のむ　じぇすちゃーをして「あれ　もってくの」「いやーぼくなんか」「《あれはつねに》もちあるいているんでしょう」「＝＝そそそそそそ＝＝」「そですか、う～んほんと」「もちあるいていないよ」「あるんじゃないですかでも」「だーしてみたら」「て」「ないじゃん　ほら」「でたりとかさぁーそれとか」「いろんな　とき」「でも　わすれる」「あれ　をもってる　ことを」「で、ないか　あるかもわからない」「きおくにない」「いやもっていることが　おきわすれるのかな」「かぎみたいにさ」「ぽけっと　とか　つくえのうえに」「じぶんがじぶんを＝＝そそそそ＝＝きにしないみたいに」「そうなの　それで」「《あれをのむと》こうかてきめん　とか　おもわないわけ」「もってるだけではね」「じゃあ　のめば」「のんでるの」「のまないよ」「のんでみたいん　でしょう」「のんだことあるよね」「てか　（ゆびをさして）あるよね」「みんな　てこと」「いや　そのおもいだすとかさ」「きおくがあるんじゃない」「どんな　ものなの」「のまないよ　でもおもいだす」「みんな」「それって　どんなきおくなの」「のまないけど　おもいだすってことだよ　だれかが　わからないだれかが　それを　のんだから」「そのきもちになって」「のまないわかってしまうの」「わかってしまうんだ」「なんでそうなの」「じぶんが　じぶんを　ふ～あん　だから」「じぶんで　じぶんと」「どちらのじぶんなの」「もってくの　ほら　あれのこと」「いやーわからない　ぼくかは」「《あれはつねに》もちあるいているんでしょう」……以下略。

映画『岸辺の旅』……ジャパニーズホラー

中堂けいこ

久しぶりの映画は黒沢清監督の作品だった。『東京ソナタ』以来だ。これは記憶に残る良質な映画だった。今度もピアノが大切な小道具として扱われている。

瑞希（深津絵里）はピアノ教師をして生計をたてている。夫の優介（浅野忠信）は三年前に失踪したまま帰らない。細々と暮らしながら手をつくして捜しているところへ、ふいに夫が現れる。ここからドラマが動き出す。夫の現われかたが妙にこわい。妻が夫の好物であった白玉団子を食べていると、キッチンの暗がりにコート姿の背の高い浅野が立つ。それはもう足のあたりが暗くて幽霊だと暗示されているのだが、夫はごくふつうに「ただいま」、と。そのふつうさに「白玉食べる？」と妻が反応する。どうやら生身は死んでしまっているが未練がこうして姿を現すらしい。「土足はだめよ」といわれ夫は黒っぽい靴をぬぐ。妻の驚きと平常心との折り合いを深津絵里は見事に演じきる。浅野忠信は例によってすらりとした男ぶりでせりふまわしはわざとらしい棒読みのようで、愛する夫の帰宅に興奮をおさえきれず、まとわりつく妻のどたばたした姿が夫の幽霊らしい希薄さを助長しているようだ。

写真はいずれも「岸辺の旅」映画パンフレットより

それから夫は妻をつれて世話になった人々に会いにゆく。かって住み込んだ新聞屋、中華料理店、山あいの農家、泊まり歩きながら、そこの人々と親しみ、妻は夫の別の顔をみつけていく。妻を親しい人になじませようとする夫の不器用だがなにげない仕草、ことばのかけあい、視線のゆくえなど、監督は細部からこの異常世界を、ホラーではなくラブストーリーに仕上げようとしているようだ。

この世に未練をのこす死者は幽霊になってこの世にまぎれて暮らしている。生者となんら変わりなく、肉体と心を持っている。だれが幽霊かわからないという不自然さ、いや、生と死は分別されているのだが、愛する者たちにはあやふやになりうる、ということなのだろうか。

観賞者はこの世界の設定のしかたをうのみにする。うのみにさせるのは映画自体の構成、配役、脚本、映像の確かさにかかっている。こうしたとき、やはり深津の役者としての力量が大切で、おそらくこの映画は深津で持っている、といっていいくらいだ。私はこの女優が大好きだ。娼婦からコメディアン、弁護士、主婦、なんでもその役に入り込み演じきれる、トップクラスの女優ではないだろうか。テレビのバラエティに頻出しないのもいい。役者の素は見たくない。

二時間半の長丁場だったが、あっという間に終わった。そして見ごたえがあった。さわやかな後味である。「岸辺」とはあの世とこの世の境というよりはこの世のなかにこそ、愛する者たちの記憶がいとおしい形として「死」があるのは自然な心の様相かもしれない。

黒沢清監督『岸辺の旅』二〇一五年制作　第六十八回カンヌ国際映画祭　ある視点部門（監督賞）受賞

HANA だより　11

◆「なごみ」はゆがんでいたが……ver.2

有時秀記

山のうへに、かそけく人は住みにけり。道くだり来る心はなごめり

（釈迢空『海やまのあいだ』より）

雲のかかった山の上の街で崩れ落ちる感覚にさいなまれる人が、独りでいる。心の隠れた深みにおいて、その人は崩落の感覚をあれこれといぶしている。いや、その感覚によって、いぶされているというのが正しいだろう。

いぶされる心の襞からは、共に崩落の感覚で心をつなぐことのできる持ち主への見えない触手が伸びている。触手の先は哀切の通り道であり、この通り道が途切れるのは、危うさを増すことになるので、そこでは哀切の感覚が屹立して、存在する。通り道に哀切が流れ、哀切が通り道を浄化するように流れていく。

ふもとの、いま独りもその崩落の感覚を持ち、山上びとに寄り添い続けていたが、いつしか小雨が降り、山上とふもとの間には、たちこめる霧が視界をさえぎっている。

いつのことか、意識されないままに、崩落の感覚は二人をつないでいたのだが、霧のなかで突如の音響が「共」に崩落する感覚の「共」を断ち切りそうになり、細い蜘蛛の糸でぶら下がる「共」となる。危うくぶら下がる山上とふもとの人の、崩落の心は、透明な蜘蛛の糸でぶら下がっている。

山上の人はそれでも、心がなごんでいないと、生存の危うさに瀕するので、毎日、揺りかごのような睡眠の舟に乗っている。睡眠の舟のなかで見られる夢は、野原で流れる風の音楽をBGMにして、夢中海岸にたどり着く。ざわざわとした海岸では、ざわざわとしたさざ波の繰り返しが癒やし音楽となり、風の音楽と呼応する。

この海べりには山が迫り、ふもとがそのまま浜になり、さざ波の立つ海になだれ込んでいる。さざ波と野原の風がもたらす二重奏の音楽のなか、ふもとの人が石を放り上げると、山上にかかる雲が打ち砕け、飛散していく。

山上に住む人と、ふもとの人の崩落の感覚が長きにわたってねじれていたことが判明したのは、そのときである。山上にかかったわずかな雲は放り上げられた石によって砕け散る。放り上げられた石は山上に近くなると、みるみるうちに大きな岩となり、そのあたりの風景を占領して、雲を追い散らす。崩落のねじれは解消し、蜘蛛の糸は透明さを脱して明快になる。

こうして、ねじれがかき消されると、山上の人が、ゆっくりと山を降り、哀切の流れに身をゆだねる。ゆがんでいた「なごみ」は、ゆがまないでゆっくりと道を降りて、なごむのである。そうして、崩落の感覚は、この「なごみ」のなかで、「共」に二人の住処にある。

遥かな空では虹がかかり、砕け散った雲は幾多の鳥のように羽をはやし、二人の住処を見守って「なごみ」を支えている。。

◆影武者の生殖に関する金融商品の地層処分について

千田草介

富士山七合目における天然水の沸騰温度とセシウム13
7の半減期および東京都内のラーメン屋台総数の推移の
積算により未来予測に参照されるべきコーランの詞章は
東海道本線を運行中の貨物列車に積載されたコンテナ数
に反映された箇所となりアッラーがバールのようなもの
による破壊と殺戮の傍観者としてアル・ジャジーラのキ
ャスターの口を借りて託宣を垂れたもうとき原油価格は
零となり印度文明がその偉大さをヒマラヤ山脈に冠絶す
るものとして世界に再認識を迫ることとなるのは明白で
あるがゆえにチンパンジーのアイちゃんがぶっ叩いたキ
ーボードにより印字されたアラビア数字カナ漢字キリル
文字ハングル顔文字ヒエログリフが今後世界で作成され
る全ての墓標に刻まれることが国連総会の議決するとこ
ろとなる蓋然性は極めて高く地表より一天文単位に達す
るところでの核融合反応に呼応して11月1日に世界でつ
くられるデコレーションケーキに搭載されるイチゴの種
子の数と同日に放出される人類の総精子数が糸川式細密
占星術と高津神社の富籤の当たり番号に裏付けされたマ
ネーサプライと連動するのがまたの名をアホノミクスと
呼ぶ新経済社会政策なのである。

◆New Seasons　四つの季節

中堂けいこ

秋…ブエノスアイレスの冬とハロウィン猫
冬…ジョージ五世の上腕の刺青
春…南に楡の木を植え北に築山を築く
夏…土佐堀川と美しい虎

ギドンはオイストラフの弟子だよとTさんの声が受話器から聞こえる。ギドン・クレーメルはつま先を挙げて体をゆすり、ビヴァルディを散りばめながらタンゴを演奏する。土の匂い太陽の凹凸。弦のはじけからたわみまで遠くて近いバルトのひとびとがそこにいる。なまなましい声。もう聴けないと。帰りの歩道橋でかぼちゃの帽子をかぶった猫がいた。

逆説の明治維新とかのダイジェストをA3にコピーしてパラダイムの転換についてキーンさんの横取りを母に説明するとおおいに受け、母はその紙切れを何回も読み返しわたしに話させるのだが話がどんどん大仰になる。母は軽くなって背に負い坂の上の病院まで歩いていった。紙みたいにうすくなる母をいくども送るのだった。

桜を見にいくといって出たままの父を迎えに行かねばならないのだが、南に知らない人が高い建物を建て、日傘はいらないが下着が乾かないと妹が愚痴るので北側にこぢんまりした山を築いた。桜の苗木はあっという間に根を張り枝を張り満開の下で花見をする。父がおにぎりをほおばる。

病室の天井に土佐堀川の川面の波が写ってうたたねをすると、トラがベッドになり部屋は水仙の匂いでいっぱいになるのだった。黄と黒のだんだら模様がいつかサンボにバターにされて、黒目の大きい研修医が覗きこむ。バターがおいしくないのでセブンイレブンへバターを買いにいってきます。美しいトラはわたしの布団になりカーテンになり部屋に懐いて、毛の短さに夏をわすれる。

図書出版
まろうど社

寺岡良信
(1949-2015)

ぼくたちが
忘れてはならない
詩人がいる

寺岡良信著
詩集『龜裂』
978-4-89612-038-7
定価(本体)二〇〇〇円
B6並製　本文八八頁

いのちの限りを
託した第４詩集

〈近代詩〉の抒情性と唯美性が21世紀の今に結実する寺岡良信の美しき日本語が奏でる詩世界!!

◆第１詩集『ヴオカリーズ』
4-89612-0029-9　A5変型上製本
本文104頁　定価(本体)2000円

◆第２詩集『焚刑』
978-4-89612-034-9　A5変型上製本
本文88頁　定価(本体)2000円

◆第３詩集『凱歌』
978-4-89612-036-3　A5変型上製本
本文88頁　定価(本体)2000円

藤井貞和著
『蘇る詩学』
978-4-89612-030-1
定価(本体)五〇〇〇円
四六上製本　本文七六八頁

現代詩、物語学、文学史、詩人、物語学など幅広く活躍する“知の巨人”藤井貞和。本書は南島(奄美・沖縄)に関する論考、評論、座談会、表現を蒐めた画期的な内容。南島から詩〈うた〉が蘇る!!

〒658-0016 神戸市東灘区本山中町 4—14—19
電話&FAX 078・412・2631
E-mail　maroad_kobe@yahoo.co.jp

神戸詞（うた）あしび

96-2015.11.01 大橋愛由等

独立をのぞむ人たち カタランの行く末は

一九七七年のことである。ギリシアからはじめたヨーロッパへの学生ひとり旅は、イタリア、ドイツ、スイスを経て、スペインに向かっていた。

その二年前に独裁者フランコが死去したばかりだったので、スペインは民主化された国とは言いがたかった。

まず降り立ったのは、バルセロナ。そこはヨーロッパの都市のひとつであることは、他のスペイン各都市をめぐってあらためて感じたことであった。

いくつかの事実を語ろう。建築中（まだ天井はなかった）であるガウディのサクラダ・ファミリア教会の中にあった音声ガイド。ヨーロッパ各国語が表示されているうち、一番最初が自国語であるスペイン語ではなくフランス語であった（他に英語、ドイツ語など）。しかもスペイン語と表記された文字盤は恣意的に傷つけられていた。

スペイン・カタラン地方は独立に向かうのか
「独立」文字で気勢を上げるバルセロナのひとたち

書店での思い出である。バルセロナはスペイン国内でも出版業が盛んな都市である。フランコ時代に永く禁じられていたカタラン（カタルーニャ）語の書籍も並べられていた。カタラン料理に関する本を一冊購入した。カタラン語版とスペイン語版があった。スペイン語版なら日本に持って帰っても読解するひとはいるだろうとこちらを選択した。ちなみにカタラン語版は上製本、スペイン語版は並製本であった。

そして時は飛んで今月の話しである。スペインからやってきたという青年をつれた日本人グループがいた。スペイン語メニューをみて注文したのか、フィデオス。米ではなくパスタでつくるパエジャである。その選択をきいてふううんと思った。さらにスペインビールの「マオー」は注文しなかった。そこでその青年に出身地を聴くまでもなかったが聴いてみた。「どこから来た？」「バルセロナ」。フィデオスはカタランの人たちがよく食べる料理（他のスペイン各地でも食べるが）、「マオー」ビールは本社がマドリードで、かつサッカーチーム「リアル・マドリード」のオフィシャルスポンサーである。バルセロナのひとたちはほぼ間違いなくF・Cバルセロナの熱烈なファンであり、リアル・マドリードは根元的な宿敵（ライバル）である。

9月27日に行われたカタラン自治州の州議会選挙で、独立容認派が過半数を占めた。その投票を前に、カタランの人たちは、バルセロナの街で大規模なデモンストレーションを行い、スペインから「独立」するのだと気勢を上げた。〈Catalonia is not Spain〉――こうしたカタランの人たちの独立志向を短い言葉で説明するのはむつかしい。いかにもスペインらしいイメージがする闘牛を州法で禁止したり、フラメンコとカタランと結び付けられるのを嫌がったりする気風。スペインのGDPの二割を生み出しているのに、それに見合った地域振興がなされていないとする不満。かつてスペイン王国に統合される前に、シチリアなど南欧各地を領土とした黄金時代があった歴史的記憶。こうしたさまざまな思いがいまスペインからの独立へと収斂しようとしている。――そして、この独立への道を有言無言のうちにながめている地域はヨーロッパだけではなく、〝沖縄〟も含まれていることを最後につけたしておこう。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.107
神戸

2015年11月01日　通巻107号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等（「Mélange」同人）
maroad66454@gmail.com
定価600円(税込)